

『東大がつくった確かな未来視点を持つための高齢社会の教科書』

第一回「高齢社会検定試験」公式テキスト

発行日 2013年3月30日
編著者 東京大学高齢社会総合研究機構
発行所 ベネッセコーポレーション
定価 1800円+税

「高齢社会と騒いでいるだけでなく、確かな未来視点を自ら持て」という提言に私は強く賛同します！

日野原重明（聖路加国際病院理事長）

世界中で日本が高齢社会のトップバッターにならざるを得ないなら、リスペクトされる知見と行動力を持て。

小宮山宏（三菱総合研究所理事長、前東京大学総長）



.....高齢期人生への東大からの贈り物

予告より少し遅れたが、それでも12月までの新資料を収めながら奥付では3月期末に間に合わせたところに、事務局・編集サイドの並みならぬ労苦が推察される多重で柔構造をもった教科書本である。（2色刷り。312ページ。本文33字×40行。図表多数）

まず「東大がつくった」というタイトルをつけたところに街談巷議での賛否は分かれるだろう。が、ひねればひねるほど毀誉褒貶が増す世相だから、直球で悪乗りジャーナリズムを撃退しておくほうがいいという判断は、東大らしい“世相の読み”を感じさせる。はじめに言うてしまうが、第一回検定日の9月14日（土曜日）が、「老人の日」の前日、「敬老の日」（第三月曜日）の前々日に設定されているところにも、用意周到な“世相の読み”を感じさせるカッコよさ（クール）がある。

他がやらないうちに「東大がつくった」と読めば、課題そのものはこの国に潜在しているのに巷間の対応がいかにもにぶく遅延しているという“学界からの有訴”すらうかがえようというものである。実際にジェロントロジーとジェロンテクノロジーをいっしょに説くほどに、この国の「高齢社会」（「高齢者社会」ではない）にかんする対処は手つかずのまま遅延している。制作にあたった東京大学高齢社会総合研究機構からして2009年4月の設立という新参機構なのである。とはいえ各分野のしっかりした基礎研究を総合化して、短時日にここまでまとめあげた学界の底力には頼りがいがある。

上に「巷間」といったが、それは学界をのぞいた政界、経済界、官僚そしてジャーナリ

ズムと世論にまで及ぶもので、雑に言えば現状では学界の独り舞台なのである。この本をつくった東大関係者の方々もそう自負しているにちがいない。

検定はさておいて、この国で暮らす高齢者の高齢期人生への東大からの贈り物である。

.....先行でなく先進的な「高齢社会」に向かって

上に「高齢者社会」といったが、わが国政府の「社会保障」事業は年々1兆円を積み上げながら、高齢者3経費（年金・医療・介護）をはじめ、社会福祉、生活保護ほかに及ぶまで高齢者個人を支える「高齢者社会」に対して実施されてきたのであった。それら社会保障関係経費を除いた「高齢社会対策」への予算の少なさをみればよくわかる。

よく引かれる指標だが、「高齢化社会」（高齢化率7%から14%まで）のあいだはそれでよかったといえるだろう。高齢者（65歳以上）が増えて7%を超えるところからその倍加年数である14%を超えるところまでを「高齢化社会」と呼んでいる。そこから本格的な「高齢社会」へ向かう。ご存じのようにいまや日本の高齢者は3000万人に達し、世界一の「超高齢社会（本格的な高齢社会）」（24・1%）になっている。それなのに高齢者一人ひとりに成員としての実感も自覚もない。巷間にそれを危ぶむ世論もない。

ひとつの指標といえばそれまでだし、「高齢化社会」であった期間がわずか24年（1970年～1994年）では、あまりにも短くてなすすべもなかったといえばそれまでである。フランスは126年（115年という資料も）、スウェーデンは85年、イギリスが47年、ドイツが40年という。高齢化の進み方がゆっくりなら高齢社会対策もそれなりのペースですすめられたのだが。といったところで、わが国が手つかずできたことの言いわけをしてもしかたがない。対策がない間に、国民の活力は確実に「デフレーション（萎縮）」にむかい、ほかならぬ高齢者層にしわよせが及んできているのである。

わが国は「高齢者社会」としては国際的に先行しているが、先進的な「高齢社会構想」がない。だから先進的な「高齢社会」に向かっていない。このままでは「日本高齢社会」は失敗モデル事例になりかねない。1999年を「国際高齢者年」と定めて国連が要請した「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」（高齢者五原則）のうち、国際水準を保持しているのはケアだけ。「日本高齢社会」達成の任にあたる政治家、官僚、学者、ジャーナリズムそしてほかならぬ高齢者に、なお関心が欠如している。

.....個人として自立し新たな社会をつくる糧に

ここに一冊の「高齢社会」にかんする総合的教科書が登場した。

『東大がつくった確かな未来視点を持つための高齢社会の教科書』

第一回「高齢社会検定試験」公式テキスト

である。

「高齢者」と「高齢社会」にかかわるすべての領域をカバーしようと努め、20章に振り分けている。専門領域をもつ執筆者におもいきり手足を伸ばしてもらって担当分野を広くまかせている。その上に大胆にも2030年の「超高齢未来」像を見透かしながら方向性を示している。理想主義者でなければ果たせない領域である。

9月の第一回検定は「総論」「個人」「社会」の3部でおこなうことから、当然に本のつくりもそうになっている。

2030年の「超高齢未来」像を見透かしながらの「総論」3章の視点は、まずは1章で現状を把握し、2章で課題を整理し、3章で解決にむけた方向性を示す。

「個人編」の9章は、生き方（三つのステージ）、活躍の仕方（就労・参加・学習）、住まい、移動、暮らしとお金、支える資源、そして老化の理解、認知・行動障害、最後の日々。

「社会編」の8章は、社会保障、医療、介護・福祉、年金、そして住宅（まちづくり）、移動システム、技術、法・制度に整理されている。

執筆者は16人。それぞれ詳細な経歴は紹介されているが、生年が伏せられているので年齢はおおよしかわからない。多くは東大アカデメイアの丘に学んだ人たちである。（「森」の上の木はしっかり見定めているが、言い過ぎをあえてすれば、下の林についてはいささか心もとないのである。章建て、裾野への目配りはこれから）

「東大がつくった」のだからいたしかたないといわれかねないのが、「欧米型高齢社会」日本版への指向である。海外の先行学者からの影響を脱していない。国際的に先行しているのだから、日本伝来のあるいは特性をもつ「日本（型）高齢社会」への指向と総合性が期待されるのだが、その視座が希薄なのである。

.....「日本型高齢社会」をめざして

まずはこの国の風土がもつ「地域特性としての四季」をどう組み込むか。洋装・洋風の暮らし指向ばかりでなく、この国での人生は和装・和食・和風の住まい方など季節折々の衣・食・住によって成り立っており、とくに高齢期の人生を地域・在宅をめざした充足に期待するなら、この半世紀とともに得た人生の長寿期に、この半世紀とともに失った地域のよきものの再生を組み込むべきだろう。旬の食、季節の衣・四季折々の地域のくらしぶりは、いま高齢期を過ごす人びとの人生に喜びを与える不可欠の要件だからである。

「日本型」というか「東洋型」というか、欧米とは異なる死生観、生命認識、人生への理解もまた導入すべきであろう。哲学者の練り上げた論理体系など必要としない。身近な暮らしの中で実感することだからである。この国に生まれ、育ち、過ごして死ぬ人は、自分の生命の存在過程を、

「からだ・こころ（こころざし）・ふるまい」（体・心=志・行）

の3元（カテゴリー）として認識しているのである。東洋の哲学の基本にある考え方であり、生命の観察を究めればこの3つ以外にないといっている。「心・技・体」とも、「健康・知識・技能」とも、「医療・認知症・介護」とも視点によって異なるが。お元気な蟹江ギンさんの娘さんたちなら「たべる・しゃべる・自分でする」ともなる。本書に散見する「知識と経験」「心理と生理」「心と体」といった2分類分析の不完全さがみえてくる。

たとえばp156の図2「高齢者の持つ多様性と問題」のうち「家庭・社会的問題」を「行動的問題」として「行動の老化の特徴」をいれて、体（医療）、心（認知症）、行動（介護）の3セットにさせていただくと明解になる。「家庭・社会的問題」は次元が異なる範疇だ

からである。したがってここは章立ても、「老いの理解」と「最後の日々」とのあいだに、「高齢期特有の疾病（医療）」「認知症への対応」「行動障害への対応（介護）」とすると高齢期の日常生活での実情が身をもって明解になる。

わが高齢期人生への東大からの贈り物という慕わしさが深まる場所である。

.....いくつか気づいたところについて

気づいたところをいくつか。東大以外の学者が検討し内閣府の官僚がまとめた「高齢社会対策大綱」の解説（p. 45）についてである。東京大学ジェロントロジー・コンソーシアムが策定した「2030年超高齢未来に向けた産業界のロードマップ」（p. 47）との2点が課題解決への活動をうながす文献として紹介されているのだが、「大綱」の解説がやや配慮を欠いているといわれかねない扱いなのである。昨年9月に閣議決定された「高齢社会対策大綱」そのもの、そのための学者による検討会報告書「尊厳ある自立と支え合いを目指して」（清家篤座長）、そして直近の『高齢社会白書』をながめわたした上で整理したと推察されるが、「基本的考え方」の部分の解説が「大綱」そのものの論旨を活かした説明になっていないために「示唆しています」がやたら多く、ごちゃまぜの印象を与える。図2「高齢社会対策大綱」における基本的考え方の概要（p. 47）の内容が上記「検討会報告書」の目次「今後の超高齢社会に向けた基本的な考え方」そのままであり、欠落さえある。「大綱」は改訂としては3度目ではなく2度目である。課題解決に向けた方向性に関わる文献であり、たとえば高齢者の意識改革では、「65歳以上を一律に高齢者として扱う」ことの違和感とともに、「人生65年時代」の「支えられる高齢者」から「人生90年時代」の「支える側の高齢者」への意識改革こそが「高齢社会」形成へのカギであるという指摘などは触れておかなければならない点であろう。

ブックデザインについては、担当する若いデザイナーとの調整で決められたのだろうが、本文33字×40行で欄外に注という体裁は、思いのほか余白が多くなったこと。2色刷りとしては多様な表現を工夫しているが、高齢者への配慮よりもデザインを優先した表や図が見られる。制作上の難題があるのであろうが、左右版面いっぱいを使って扱うべき図表を本文欄におしこめたことで、高齢読者への配慮の欠如となった。認知症のチェックシート（p. 161）や介護サービスメニュー（p. 240）などは左右を通してし、認知機能のアンチエイジングの図（p. 177）は本文に割ってはいっているのだから。

「高齢期」に要するお金についての記述は、「森」の上の木をみて下の林をみない執筆者の視点が許容されている。きびしい実態への追求を欠いた不備は指摘されるだろう。

用語の統一や文体については編集者側の綿密な指摘や要請をうけた執筆者の検討がなされたのであろう、読み通しての違和感はない。

「索引」については、6ページ300項目はやや少ない。あまり適切とはいえないかぬる比喩としての「多毛作人生」などは採用しておらず見識を感じるが、孤独死、尊厳死、延命治療あたりはあっていい項目である。

ジャーナリストの立場からすれば「高齢者・高齢社会と情報」という1章がほしいとこ

ろである。

.....やや辛口の三つの要望

本書が巷間的话题となり、よく読まれて、検定がにぎやかに行なわれることを期待しているが、上に記してきたように三つの点をやや辛口の要望としておきたい。脱欧米先進意識、脱世代、脱学界（脱東大）である。

まずは脱欧米先進意識。この国ではとくに学問上では、相手を説き伏せるのに海外の先進事例を探してきて“横文字”で示すスタイルが多すぎることである。この後進国的手法はあってもしかたがない範囲にとどめて、高齢社会の先行国らしくこの国の事例から課題を抽出して「日本（型）高齢社会」の論立てを多くして行ってほしいのである。

二つ目は脱世代。本書はいたしかたなく執筆者世代による自分たちのための「高齢社会」論であるということである。執筆者の年齢の幅を知りたかったのはそのため。百歩までは譲れないが、議論を重ねながらここまで「高齢社会」構想をまとめあげた労は多とするが、中心になった50～60歳代の現役の教授・准教授が納得したレベルの「自分たちのための高齢社会」であり、2030年構想はまさにその達成型ということになる。いま高齢期を生きている人びとの声をどれほど聞いて取り入れたか。たとえば5万人に達した百歳の人びとの人生を、「からだ・こころ・ふるまい」の面から調査して1章をもうけるといったリアルな多重の視点をもってほしいのである。

三つ目は脱学界である。学界内の脱東大は意識しているであろうしできないことではない。脱学界である。東大アカデメイアの丘に集って城ごもりして烽火をあげたわけだが、いったいどれほどの経費をどこから得てのことなのか。全国各地で、水玉模様のように小さくとも医療・介護・福祉の現場で働いている人たち、身銭をきって高齢社会活動をしている人たちに、烽火はわがこととして見えているのかどうか。遠からず、武道館をいっぱいにするような「検定」がおこなわれて、「東大がつくった教科書による高齢社会」がこの国に根づくことになる。それはジャーナリズムの側からも見定めつづけねばならない課題であり夢となった。（2013・4・15～5・3 堀内正範）